（1）

年5回シリーズ「防災ミニ教室」3年目

東日本大震災の被災者招き心構え学ぶ

6月からスタートした防災ミニ教室

継続の大切さ実感

みくに地区まち協 防災・安心部会

みくに地区まちづくり協議会（坂井市）の防災・安心部会の「防災ミニ教室」が今年度で3年目に。年間5回のシリーズで毎回30～40人が参加、炊飯や津波、要支援者など災害の基礎を学ぶとともに、現場には行って避難の仕方をチェックし、テントを使うなどして避難所生活も体験している。今年度は「防災ミニ教室」に加えて、東日本大震災の被災者を招いて、ディアでは伝わらない生の声を聞き、被災地の復興の大切さを再認識した。防災意識の入った参加者の

「家庭で備蓄」「生き延びる知恵を」

「防災ミニ教室」は毎月、防災の講から、ドライスを含めている松田敦の福井工大准教授（土木科）、竹

防災ミニ教室は、高田のテーマを決めて、毎年度末までに1時間半のロングラーで、今年度は全部で5回（6月、8月）開かれた。1日目は「日本の災害をイメージしよう」（位置をイメージしよう）のテーマで中学生から高齢者まで約45人が参加。10日本は世界有数の地震国。生しなかった」などと被害の実情は厳しい。首都圏の水や食料などの準備、家族の話し合いなど防災への課題は多い。住民に防災意識を高めるとともに、地域で助け合う共助の仕組みが必要である。

「避難」に女性、要支援者の視点

本年度は避難所運営に女性や、要支援者の視点を取り入れ、参加者にも広く呼びかけ、今年度は子ども連れの人も参加。女性には看護支援などのアイデアが出た。

防災ミニ教室に参加した地元の女性は、「家族の安否が気になって、仕事に集中できない。家族の安否を確認する方法を教えてほしい」と話した。

参加者の「生き延びる知恵を」という要望に応えて、今年度は「地域の人たちとの共助」をテーマに、「家族の安否確認」「地域の人たちとの共助」「要支援者の視点」「地域の人たちとの共助」「要支援者の視点」「地域の人たちとの共助」「要支援者の視点